

平成 22 年大学職員情報化研究講習会 ～応用コース～
第2分科会 教職協働で進める教育支援のマネジメント
A グループ最終報告書

大阪学院大学 立教大学
関西大学 流通経済大学
日本大学 早稲田大学
広島工業大学

平成 22 年 11 月 10 日(水)～12 日(金)
会場: 浜名湖ロイヤルホテル

～ 議論の過程とテーマ決定まで ～

まず始めに、自己紹介を兼ねて各自日頃抱えている課題や問題点について自由にディスカッションを行なった。挙げられた課題の中には本研修(分科会)のテーマとは関係性の薄いものも多くあったが、この時間はチームとしての相互理解を深める有意義な時間であった。

フリーディスカッションで大阪学院大学よりご紹介いただいたキャリア教育支援の取り組みは他大学から見ると非常に興味深いものであった。この取り組みの特徴的な点は、「キャリアデザイン科目」が正課科目として組み込まれており、全 15 回の講義のうち 5 回程度をキャリアセンターの職員が担当するなど教職協働で授業運営をし、授業計画を立てていくプロセスがあるという点である。

二日目には日本福祉大学からの事例紹介(プレゼンテーション)として具体的な取り組み事例が聞けたことで、「教職協働」のイメージの一例を掴むことができた。

それを受けて、本分科会の趣旨である「教職協働で進める教育支援のマネジメント」を意識しながら、先に各大学から課題として挙げた項目の中から「キャリア支援における教職協働のマネジメントモデル構築」と「授業評価アンケートの有効活用」の 2 点をピックアップし、テーマを決定するための議論を行なったが、各自の本分科会の趣旨に関する理解やイメージに差異があり、すんなりとは決まらなかった。

そこで、本分科会の趣旨に沿った形の討議を行うため、「教職協働」、「教育支援」、「マネジメント」の 3 つのキーワードを整理/共有した。ICT 活用はあくまで手段であってこれが目的化してはならないという意見では皆が一致し、結局は何をどう進めていくかが最も重要であるとの認識に達した。特に「何を」の部分となる「教育支援」という言葉はかなり幅広い意味を持っているため、重点的に検討を行った結果、ここでは「授業支援」と位置付けることとした。

ピックアップした課題のうち 1 つは授業評価アンケートに関するものであるが、議論の中で、基礎学力の低下によって授業内容の理解が不十分な学生が増加しているために学生の理解度に差が生じている。理解が不十分な学生は学びの場面において十分な達成感を得られず、自らの成長を停滞させてしまうだけでなく、その授業全体を考えた場合にも、授業の進行に伴いさらなる理解度の拡大を生み、ひいては質の保証の観点からも悪影響を与えてしまうのではないかという仮説を立てた。

授業評価アンケートの結果分析と適切な対応により、これらの学生の“成長”を促し、自ら“学ぶ力”を育み、学習における“達成感”を引き出すことが可能になるのではと考え、テーマの大枠が徐々に固まってきた。

また、「教職協働」については、「教員と職員がパートナー関係を構築し、共通の目的に向かって協働すること。」と定義した。これを実現するにあたっては、教員と職員の相互理解を深めることが重要であり、そのため

には教員と職員が気軽に話し合える雰囲気作りが大切であるとの意見が出た。3 つめのキーワード「マネジメント」については後述したい。

先に行なった課題・問題点の洗い出しの際に、「授業評価アンケート」は各大学で導入されているが、それがどの程度フィードバックされ、活用されているかという点に関しては不十分な運用となってしまうと認識している大学が多かった。具体的には、アンケート結果のフィードバックは全体的な傾向を示すのみで詳細な分析には至っていない、教員個人へのフィードバックになっている、そもそも授業評価アンケート実施にあたって一部教員からの反発が強いなどの意見が挙げられた。これらのことから、現状ではせつかく実施した授業評価アンケートが授業改善に結びついていないのではないかと認識で一致した。

上記の議論を経て、「授業評価を学生の理解度・満足度向上につなげるマネジメントモデル」を A グループのテーマとして決定した。

～ 実現案の検討とまとめ ～

実現案の検討にあたっては、3 つ目のキーワードである「マネジメント」を意識し、授業評価アンケート実施のプロセスをPDCA サイクルに当てはめて、それぞれの段階において、教員、職員、学生の関わり方を現状分析した。現状分析の過程で課題として認識した主な点を以下に挙げる。

1 つ目は、アンケート結果の分析ならびに改善は各教員に依存しているため、アンケート結果が授業改善にどこまで活かされているかは疑問という点である。

2 つ目は、教員が分析を行おうと思っても結果がフィードバックされるタイミングが何ヶ月も先になるため、改善を行おうと思っても、次学期以降の授業での反映となってしまう点である。

3 つ目は、授業評価アンケートの意図が学生に十分に伝わっていないために、回答率が低くなってしまいう点である。これはアンケートの設計段階における教員の参画が十分ではないことがその理由の一つだと考えられる。

上記の1 点目と2 点目に関しては、

「授業評価アンケート兼小テストを毎回実施し、結果をリアルタイムにフィードバックすることで、学生の理解度の差を埋めていけるよう教員に工夫を促す。」

ことで解決できると考え、これを当課題の改善案として提案したい。

単なる授業評価アンケートの実施ではないことがポイントであり、小テストも織り交ぜながら同時に行うことにより学生の興味を引き付ける効果があるのではないかと考えた。

教員にとっては学生からの反応をリアルタイムかつダイレクトに把握することにより、アンケート結果を授業改善に活用しやすくなる。教員が本来持っている教育への熱意を刺激することにも繋がると考える。

3 点目に関しては、教職協働でアンケートの設計を行うことができれば解決できる部分が多いと考え、当課題の改善案として以下の支援策を提案したい。

- ① 小テスト作成支援
- ② 職員の授業参観
- ③ 出席管理支援

【①小テスト作成支援】では、複数の学生が問題の作成に関わることで事前の準備を行い、授業の理解度を深めることができるという効果が期待できる。また、当日の授業で最も優れたテスト問題に対して MVQ

(Most Valuable Question)を決定することで、その問題を作成した学生は「達成感を感じる→やる気が引き出され→学ぶ力が養成され→成長が促される」という好循環が生まれる。毎回もれなく回答した学生には(授業アンケート実施という)単位を与えるという斬新なアイデアも盛り込めると良いかも知れない。

【②職員の授業参観】では、職員がアンケートの実施をサポートをしつつ、授業見学を行い、改善点を発見する。職員が授業への改善点を挙げることに限っては、一部の教員から抵抗されるかもしれないが、このような活動をきっかけに教員と職員の信頼関係を醸成していけば、必ずしも不可能な話ではないと考える。

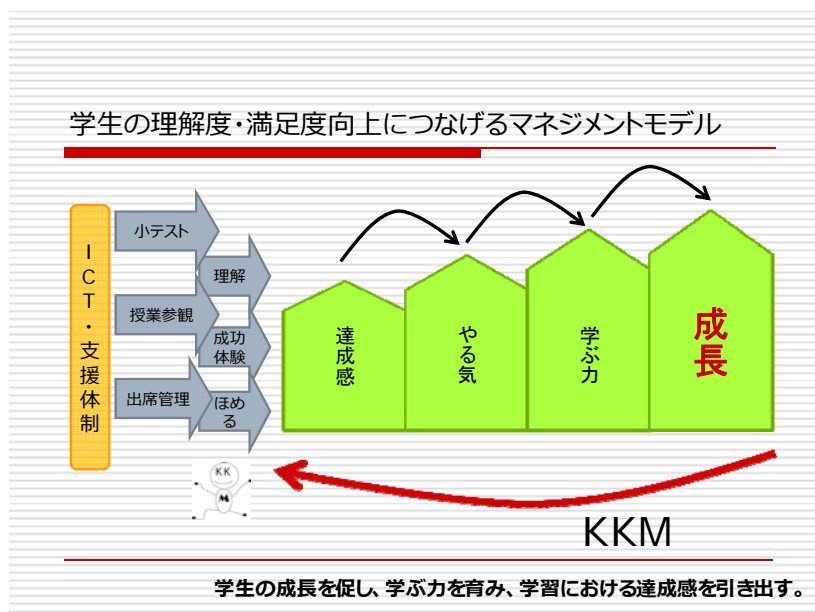
授業参観による効果としては、教員の授業改善への取り組みや学生の受講態度を観察することによって、職員も教育現場の一端を知ることができる。ひいては、入学相談会対応時に活きた情報を提供できるなどの副次的効果も期待できるとの声があった。

【③出席管理支援】は、学生の理解度の差を埋めるために、欠席した学生に対して資料や課題等を電子データで公開するなどのサポートが可能である。

これらを実現するには、一連のスキームが成り立つ支援体制の整備とリアルタイムであることを確保したICTの活用が不可欠である。

そこで、私たちAチームは「ICTと支援体制を有機的に結び付けることによって、学生の理解度・満足度向上につなげるマネジメントモデル」を“KKM(こつこつマネジメント)”と称し、提案したい。小さなことからコツコツと成功体験を積むことで、達成感を得られる過程から当名称とした。具体的には下記イメージのように、学生が「達成感を得る→やる気が湧く→学ぶ力が伸び→成長が促される」という好循環を「授業評価アンケート兼小テスト」の実施や「授業参観」が後押ししてくれる仕掛けである。

今回の講習会では検討不十分のため、具体的なICTの活用事例を提案するには至らなかったが、新たなICTツールを見出すというよりは既にあるツールを視点を変えて活用することで効果を上げることができるのではないかと認識で一致した。大切なのは「様々なICTツールの利便性や効果をまずは職員が知り→教員に知ってもらい→使ってもらい→支援していく」ことだと考える。



以上